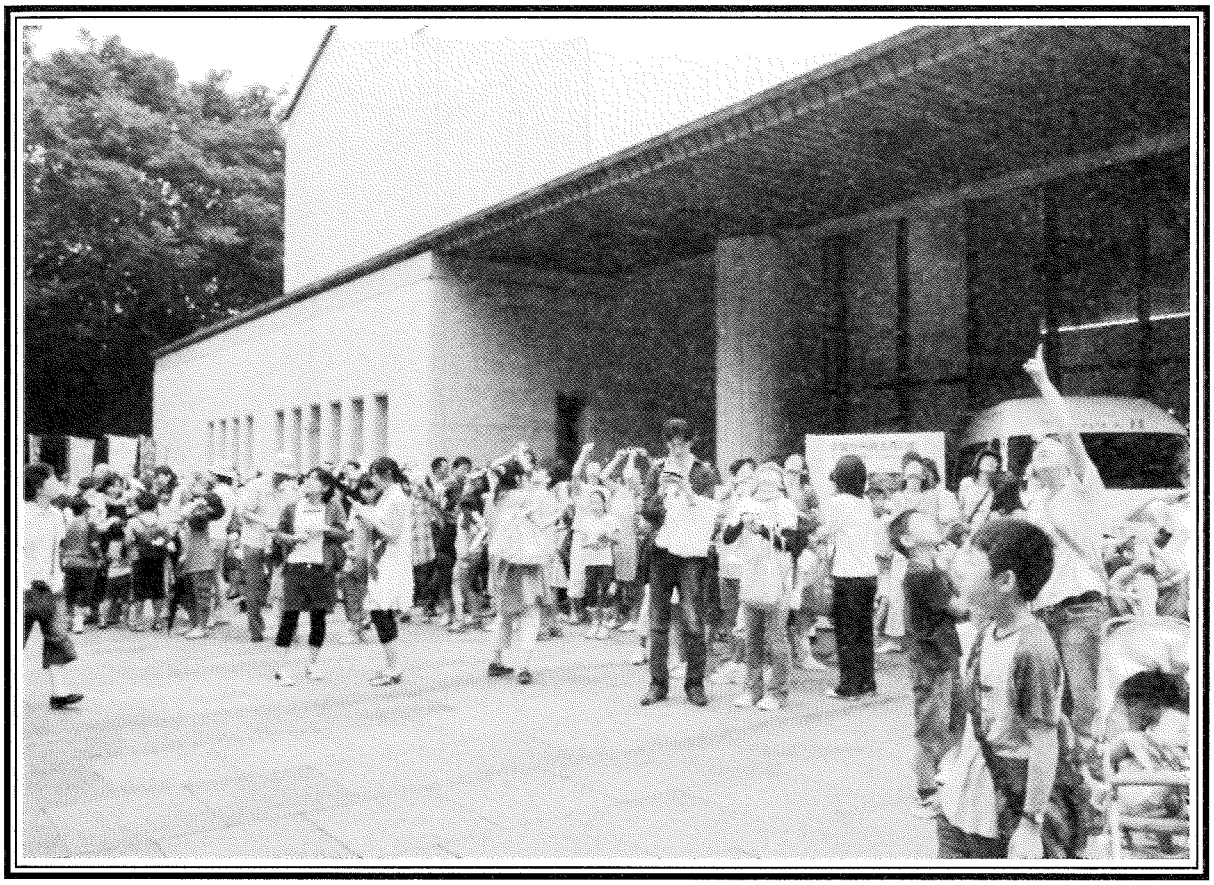
あるむぜお89

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 89　2009年 9月20日



2009年7月22日　部分日食を見上げる人々

目次

1-2 シリーズ　世界天文年
② 2009年7月22日 郷土の森博物館での日食

3 展示会案内
企画展　火の用心～江戸時代の火事と対策～
次回企画展予告　多摩川中流域の野鳥ガイド

4-5 ノート 1887年8月19日の皆既日食

6 坂本長利「土佐源氏」資料の世界 ②

7 最近の発掘調査
復元整備完了―国史跡武蔵府中熊野神社古墳―

8 小説 探鳥物語 ②　都市に暗躍する者

1609年、ガリレオ・ガリレイが人類初の望遠鏡による天体観測を行ってから今年で400年。それを記念して2009年は全世界を通じて「世界天文年」と定められています。当館でも関連の天文イベントがいくつか予定されているとともに、本紙の表紙シリーズでまつわる話を連載していきます。

シリーズ世界天文年

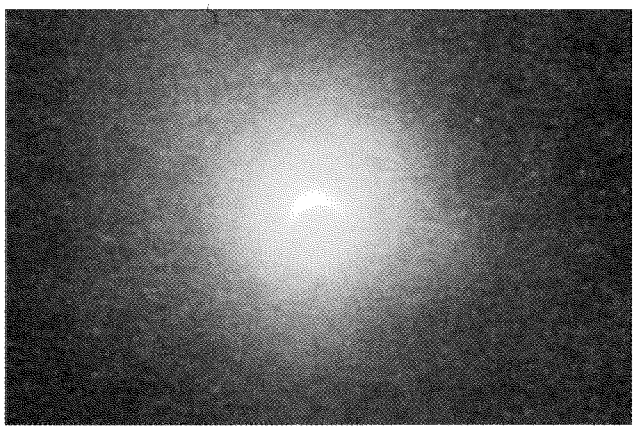
② 2009年7月22日 郷土の森博物館での日食

第2回目は去る7月22日に起きた、日本では46年ぶりの皆既日食の話題。世界的にも注目された日食当日は、皆既となる中国やトカラ列島などに日本をはじめ海外から多くの人々が詰めかけました。しかし大きな期待を裏切るかのように天候は芳しくなく、中国では上海や嘉興、日本でも悪石島などで雨や暴風雨による残念な結果となりました。反面、同じ中国でも抗州や重慶、国内では奄美大島の一部や硫黄島、その近海の船上においては何とかきれいな皆既日食を観測する幸運に恵まれました。喜怒哀楽が錯綜した日食当日でしたが、果たして郷土の森博物館ではどうだったのでしょうか。

当日の観測会を予定していた博物館でも異様な盛り上がりで、日食当日の2週間くらい前から、通常ひと月数枚の販売数であった日食グラスが日に何十枚も売れていました。月例で行っている星空観望会でも、日食の説明をプログラムに加えるだけで、天気が悪く観測に耐えない日でさえ50名以上の参加者を集めたほどです。不幸にも当日の悪天候で観測会は中止となったものの、館独自のデータ収集のため準備を始めていた所、諦めきれない多くの人が続々と足を運んできました。以下はその顛末のレポートです。

その日の東京は、朝になっても雨が上がらず、天気予報でも午前中は雨マーク、あきらめムードが漂う中、以外にも雨は思ったより早く上がりました。但し、空一面は厚い雲に覆われ、太陽の位置も分からない状況でした。一向に顔を出す気配のない太陽をうらめしく思いながらもその間、わざわざ休暇を取って駆けつけてくれたFAS(府中天文同好会)の会員や、天文ボランティアのメンバーなどと連絡を取り、中継に来ていたNHKラジオ第1放送のスタッフとも打ち合わせを行いながら待機を続けました。9時55分、日食はすでに始まっている時間ですが、太陽は相変わらず雲のベールに包まれたまま・・・。何とか集まってくれた参加者に応えようと、気象庁のホームページから衛星「ひまわり」の画像を抽出し、月の影がわずかに地球上に映る様子を公開しながら、簡単な説明を講じる苦肉の手段を展開。

やがて空が心持ち明るくなってきたため、望遠鏡の準備を始めると、散っていた参加者は再び集まりだしました。望遠鏡を覗いていた天文ボランティアの一人が「太陽が見える！」と声を上げ、



2009年7月22日の雲越しの欠けた太陽
筆者撮影　当館にて

一瞬妙な緊張感が周囲に漂いましたが、結局は見えず仕舞い。さすがにNHKラジオも来館者の落胆振りをインタビューで紹介し、中継地を移動してしまいました。

熱心な来場者の願いが空に届いたのか、その後2回のチャンスがついに訪れました。うっすらと欠けた太陽を雲越しに観察することができたのです。1回目は数十秒、2回目は数分間、わずかな時間ではあるものの確実に捉えられました。多勢が同時に気がつき、大歓声を上げました。逆境の中から、まさしく一筋の光明とはこのことでしょう。諦めかけた状況であればこそ、一瞬の日食体験は会場の一体感を生み出し、逆に思い出深い観測会となったのです。

世界天文年という節目の年に偶然にも皆既日食が観測され、結果はともかく宇宙への関心が世界的に高まったことで、有意義な自然界のプログラムであったことは言うまでもありません。

その後の太陽は、日食時間が終了するまで一度も姿を現すことはありませんでした。(本間隆幸)

企画展　火の用心 ～江戸時代の火事と対策～

9月19日（土）～11月23日（祝）

会場：本館2階企画展示室

消防自動車も消火器もない江戸時代、火事が人々にもたらす被害は甚大でした。江戸時代の府中の火事で多くの記録が残っているのは、正保3年（1646）の大火です。この火事で六所宮（現大國魂神社）の社殿や、将軍が御成の際に逗留した府中御殿が焼失しました。また、天保6年（1835）や安政6年（1859）などにも大火が起っています。

火事が起きた時、江戸時代の人々はどうしたのでしょうか。万一火元になってしまったらどうなってしまうのか、運悪く罹災者になった時の救済処置はあったのかなどを紹介するとともに、江戸時代の府中の消火道具や消防組織に関する資料を展示します。

「火伏せ」の呪文が記された徳利

また、この恐ろしい災禍を避けるために行われた、神社仏閣への祈願やまじないなどの「火伏せ」についても取り上げます。これは現代の私たちも行うことですが、火事の脅威が大きかった江戸時代においては、切実な祈りであったことでしょう。「火伏せ」の神として有名なのは、京都の愛宕山と静岡の秋葉山ですが、府中でも愛宕山からお札をもらったり、秋葉山へ代参したりしています。秋葉山に関しては、市内に「秋葉常夜灯」と呼ばれる「火伏せ」の灯籠が5基あり、人々は日々火を灯し火難に遭わないことを祈りました。

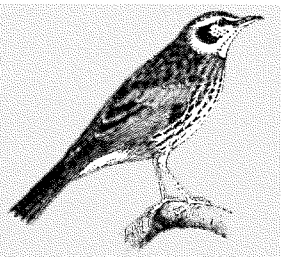
このほか府中市内には、「火伏せ」の呪文が記された徳利や梁、「水」の文字が刻まれた鬼瓦が残っています。

このように、江戸時代の人々は火事を人知の及ばないものとして畏怖し、様々な対策を講じてきました。本展では、消火設備が不十分な江戸時代の人々の火事に対する意識や対策を通して、火災が増加する季節の到来の前に、皆さんに防火について考えていただきたいと思います。

（花木知子）

次回企画展予告

多摩川中流域の野鳥ガイド



12月5日（土）～5月5日（祝）
本館2階企画展示室

多摩川中流域の自然‥‥そこには本流の流れがあります。河原があります。川が削ってできた段丘地形があります。段丘下には清水も湧きます。多様な環境だからこそ、そこに生息する生物も豊富であり、各々の生態系が確立しているのです。植物や昆虫が増えれば、おのずと野鳥も集まってきます。府中周辺の多摩川中流域に見られる野鳥は、季節限定の渡り鳥も含めて非常に多種だと言えるでしょう。展示では、多摩川中流域の特徴的な自然環境と、そこで観察できる野鳥とのつながりを検証してみたいと思います。

NOTE

1887年8月19日の皆既日食

本間隆幸

百一年目の日食（錦絵）
当館所蔵

世界天文年という記念すべき年に、日本では46年ぶりとなる皆既日食の観測機会に恵まれたものの、一転不運の結末となった経緯は表紙連載の稿で紹介した通りです。過去を遡る時、興味深い日食の記録は数あれど、ここでは「百一年目の日食」なる1枚の錦絵を基に、明治時代の皆既日食に焦点を当ててみたいと思います。

1887年の皆既日食概要

その皆既日食は1887年8月19日、日本時間で13時10分、ドイツのライプチヒ西側でスタートしました。皆既が見られる範囲は、ベルリン、モスクワ北を移動、シベリア、モンゴル東端、中国の長春等を経て、さらに新潟や福島・茨城などを横断して太平洋に抜けた後、15時55分に終了しました。

日本では、15時22分に佐渡島で皆既を迎え、その1分後には新潟県三条市でも皆既となりました。こうした皆既帯は新潟県をほぼ覆うような形で広がり、長野北部、山形南部、福島県ほぼ全域、宮城県南部、群馬県北東部、栃木県、埼玉北東部、茨木県、千葉県北東部の広い範囲を帯状に進んでいきました。

101年目の日食

当館では、この時の日食を事前に知らせる錦絵（瓦版）（上写真）を所蔵しています。三鷹の国立天文台にも同じものが所蔵されていますが、そちらには、「明治二十年七月廿六日御届　編集兼出版人　神田区末廣町十番地　岡田常三郎」の記載があります。当館資料ではこの部分が切り取られていますが、これにより都内で日食があった直前に発行されたものだと分かります。本文には、この皆既日食観測のためにアメリカから天文学者のD・P・トッド氏が来日し、東京帝国大学理科大学（現東京大学理学部）教授寺尾氏他が日光・新潟・白河等に遠征する旨が記載されています。

この日食で東京の食分は0.99であり、皆既と

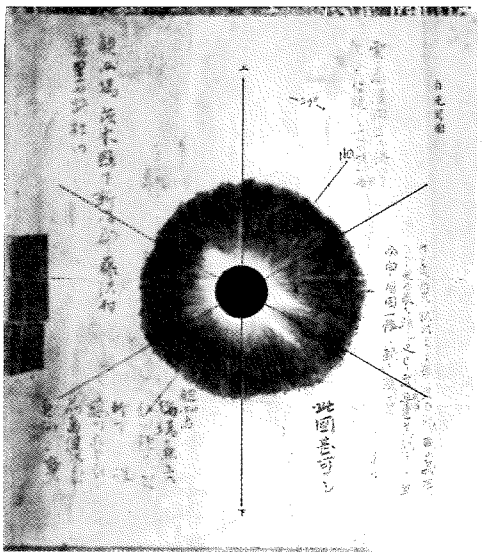
はいきませんでしたが、かなり周囲は薄暗くなったようです。錦絵には行燈を持つ人や、欠けた太陽を直接見ている人が描かれていますが、見慣れない現象を予測の範疇で表している様が大変興味深く感じられます。この時発行の官報には、日食観測の方法について、ガラスに硫黄、あるいはロウソクによってススを一方は濃く、反対側は徐々に薄くなるように付けて日食グラスを作り、欠け始めは濃い所、皆既となり光が消える頃には薄い所で見るようにと記されています。日食の見方として、江戸時代後半以降は、泥水をはった桶に映す方法、板に穴を開けて地面に映す方法、ススをつけたガラスを通して見る方法が知られていたようですが、絵の中には一人もそのような方法で見ている人はいません。望遠鏡を向けている人もいますが、サングラスなどで減光しているかどうかは不明です。下図は、同じ時期に別の場所で発行された瓦版です。こちらも同様に行燈を持

明治二十歳八月十九日日食九分九厘余
国立天文台所蔵

ち、ススを付けたガラスなどは持たずに、そのまま見上げている様子が描かれています。

この日食では、皆既帯の各郡や役所には内務省から、各小中学校には文部省から、それぞれ日食観測の心得書が配布され、一般大衆には官報により、それぞれ皆既時刻の測定やコロナのスケッチの取り方を指導しています。

この時の観測報告やスケッチが最近国立天文台で再発見されました。右上の写真は、そのス



1887年皆既日食スケッチ　国立天文台所蔵

ケッチの1枚です。

観測者は茨城県新治郡藤沢村（現土浦市）の橋場兼吉他5名と記載されています。右斜め上のN⊙が太陽の北極方向を示し、比較的穏やかな様子がわかります。反対に赤道方向では大きなコロナの流れが描かれています。2年後には太陽活動が極小期に入っていることから、静穏期と活動期の中間型のコロナが見えていたと考えられます。

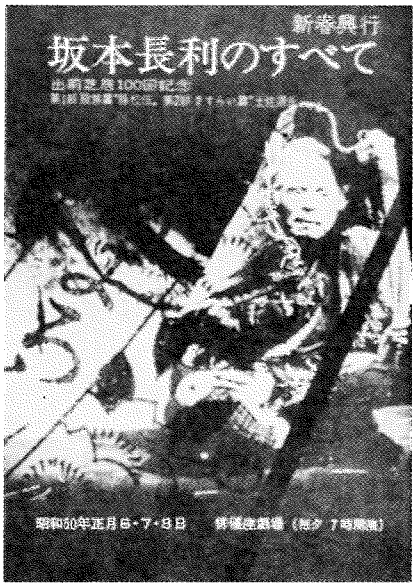
この皆既日食では、国内で初めてコロナの写真が撮影され、一般人からの観測記録が当時の東京天文台（現国立天文台）に多数寄せられました。明治に入り近代化を進める日本にとって、実にタイムリーな時期にこのような科学的成果の足跡を記すことができたといえるでしょう。

101年前の日食

101年目の日食については以上ですが、逆に錦絵が示した「百一年目」を遡った年、すなわち1786年に起きた日食も紹介しておきます。江戸時代の記録から多くを知ることはできませんが、計算により金環・皆既日食であったと推察されます。日本列島では、奄美諸島の一部で皆既日食となり、紀伊半島から愛知、仙台にかけては金環日食が見られたようです。この日食以降13年間で5回もの日食が数えられ、13年目の1799年には奥多摩で日食供養塔なるものが建てられました。これは「日食は村に広まる疫病を、お天道さまが代わりに病んでくださったものだ」という地域の伝承に由来するもので、何時の世も太陽が神秘に包まれた母なる天体だと考えられていたことがわかります。

坂本長利「土佐源氏」資料の世界

② 1,100回以上の出前芝居



1975年（昭和50）、東京、俳優座劇場で1月6日から3日連続で行われた、「土佐源氏」100回記念公演の際つくられたパンフレット。

府中ゆかりの民俗学者・宮本常一の代表作「土佐源氏」（『忘れられた日本人』所収）。その世界にはまった俳優・坂本長利さん。40年以上にわたり「土佐源氏」を一人芝居で演じてきた坂本さんより、約2,000点の「土佐源氏」関係資料が博物館に寄贈されました。この連載ではその資料をもとにして「土佐源氏」の世界をご紹介します。

はじめての「土佐源氏」公演は、新宿にあったモダンアートという劇場。ストリップの幕間でのことだったそうです。舞台は夜、登場はしませんが想定される聞き手は宮本常一。80歳を越えた盲目の老人が、自身の送ってきた赤裸々な人生遍歴を一人語りする芝居は好評を得、次々と公演依頼が舞い込むようになりました。

台本を手直ししたり衣装、効果音などを変えながらも、劇場はもちろんのこと個人宅、工場、寺の境内など頼まれれば全国各地どこにでも出向いて「土佐源氏」を演じてきました。そのため、坂本さんの公演ポスターやチラシの多くには「出前芝居」と記されています。

北海道から沖縄まで、公演していない都道府県はありません。それどころがポーランドやイギリス、ブラジル、韓国などでも公演しています。公演回数は1967年（昭和42）の初演から1,100回以上になります。

公演回数は時に記念碑的な意味を持ちます。300回を突破した際にはそれを記念してＬＰレコードが制作され、記念本『坂本長利　土佐源氏の世界』（劇書房）が発行されました。500回、1,000回を突破した際はそれぞれ記念公演として、大きな会場で行われました。1,000回記念の際には写真集『気』（私家版）も発行されています。

広島県因島市で行われた1,000回記念公演を契機に、ファンクラブ「坂本長利応援団」が結成されました。応援団発行の季刊『土佐源氏つうしん』は50号を超えて発行され続けています。

当館に寄贈された資料のなかには、こうした記念碑的な公演の記録、ポスター、チラシ類が多くあります。1975年（昭和55）、100回記念でつくられたパンフレット「坂本長利のすべて」では唐十郎、馬淵晴子などの俳優仲間が、300回記念本ではタレント・森田一義（タモリ）が寄稿し、1,000回記念本では演出家・倉本聡と対談しています。記念公演関係資料や記念本からは、坂本さんの芸能界での交友関係とともに、積み重ねてきた一人芝居の貫禄を知ることができるように思います。

（佐藤智敬）

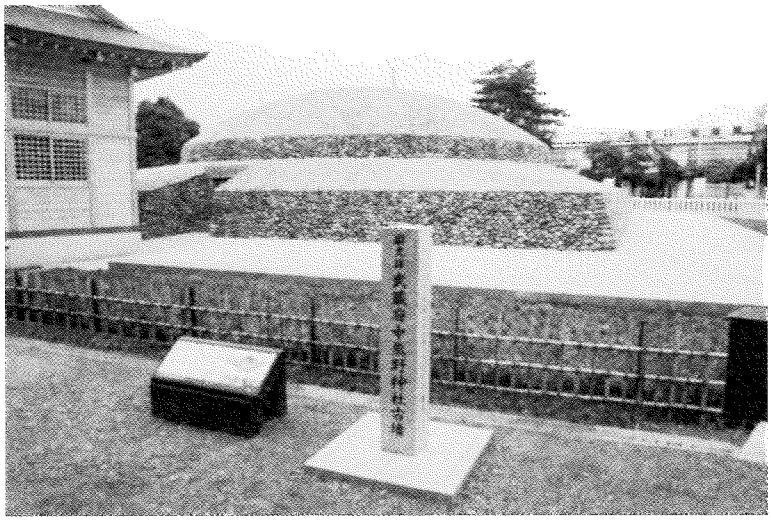
1996年（平成8）、山口県宇部市で行われた1000回記念公演チケット（ただし通算1004回目の公演）

最近の発掘調査 番外編

復元整備完了

―国史跡武蔵府中熊野神社古墳―

西府町二丁目　府中市文化振興課文化財係　塚原　二郎



復元整備された武蔵府中熊野神社古墳

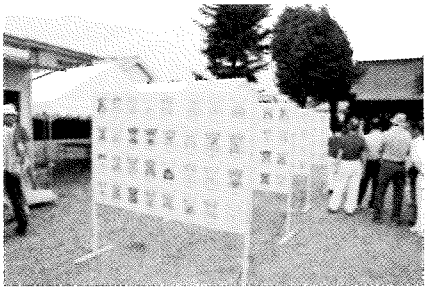
昨年から進めてきました国史跡武蔵府中熊野神社古墳の復元整備が完成し、去る8月30日に完成記念行事が行われ、一般公開されました。発掘調査により国内で最大・最古の上円下方墳と確認されてから、やっとこの日を迎えることができました。ここでは番外編として、復元した古墳の概要を紹介しましょう。

遺跡の復元整備に際しては、実際の大きさで、同じ材料を用いるのが理想です。しかし、復元した古墳は、墳丘2・3段目の平面規模は若干大きく、高さはやや低くなっています。これは、本物の古墳を保存するために、本物の古墳の上に保護層を設け、復元しているためです。また、熊野神社古墳の場合、河原石やシルト岩の切石が使われています。河原石はおそらく多摩川から持ってきたと考えられますが、現在は多摩川から石を採取することが禁じられていますので、山梨県の早川と群馬県の吾妻川から採取したものを使用しました。一方、シルト岩は近隣から採取されたと思われますが、とても軟弱なもので、使用に耐えません。そこで、質感や強度を考慮して群馬県産の「芦野石」という凝灰質安山岩を用いました。

このように、復元にあたっては本物の遺構を損うことなく、また本物に近い材料を選びました。なお、墳丘1段目は実際の大きさと同じ一辺32ｍで、墳丘全体の高さも推定高に合わせてあります。墳丘の一部に、崩落した状態で出土した河原石を使用することもできました。全体としては、往時を偲ぶことのできる復元ができたと思っています。

なお、今回の復元にあたっては、横穴式石室内部の公開も検討しましたが、残念ながら現在の技術では保存と公開の両立は難しいと判断されました。石室は崩れないように全て埋め戻し、復元した古墳の下に保存しています。今後、古墳のガイダンス施設の建設を予定していますが、その中に復元模型などの形で紹介できるように検討しているところです。

熊野神社古墳は、今年3月に開業したＪＲ南武線西府駅から徒歩8分程度で着きます。ぜひみなさんも足を運び、古墳時代にタイムスリップしてみてください。



完成記念行事の様子

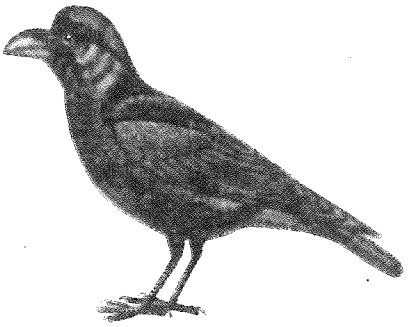
古墳の完成記念行事は、熊野神社、熊野神社氏子会、熊野神社古墳保存会のご協力を得て、にぎやかに行われました。保存会では、今後も古墳を中心としたイベントを計画していくそうです。こちらの活動にもご期待ください。

小説

探鳥物語 ②都市に暗躍する者

中村武史

「ねぇ、さっきからどこ行っちゃったんだろう？」「本当に･･･あんだけ体が大きいのによく姿を隠せるわよね」「境内の方かもしれないわよ･･･」当馬勝頼率いる少年探鳥団は、大国魂神社裏手の森で調査を兼ねた観察会の真っ最中。メンバーの奈津子、怜、世衣子が口々に探しているのは仲間の綱川勝志である。「あっ、いたいた！何やってんだろう」怜が発見して大声で呼ぶ。参道から少しばかりそれた砂利の上で綱川は何やら地面に向かって手を動かしていた。奈津子が「綱川君、どうしたの？一人だけはぐれたらダメじゃん」ふと傍らを見るとハシブトガラスの集団が餌をつついていた。どうやら綱川がパンのかけらを与えた様子。世衣子が思わず、「カラスに餌なんか与えちゃいけないんじゃないの？」と小声で呟く。綱川は悪びれもせず、「だって自分の方に集まってきたから、お腹が空いてるんじゃないかと思って････丁度お昼の残りを持っていたので･･･」奈津子が当馬を呼ぶ。「先生～、ちょっと来てくださ～い！」



ハシブトガラス

いつものようにニコニコしながら当馬が近づいて来た。「やっぱり綱川君、やさしいね。そのパン、おやつに残しておいたやつじゃないのかい？ハハハ君らしいよ、いや、感心しているんだよ私は」「でも先生、本当はこれ、あまり褒められたことではないと思います」奈津子が強い口調で場の空気を反転させる。当馬は語り始めた。「今じゃ都会の野鳥と言えばこのハシブトガラスやハシボソガラスが代表種になってしまっているが、本来平地で生活していたのはハシボソガラスで、ハシブトガラスは山野の鳥なんだよ。ほら、カラスは山に～って歌あるだろ？自分たちのテリトリーが都市化したことで多くの野鳥が棲みかを追われていった･･･でもカラスはそこに留まったんだ。何故だろうね･･雑食性で生活力旺盛な習性が都市に生活する基盤になっている。それに黙っていても人間がゴミを出すから、苦労無く餌がもらえることを学習したんだよ。実に賢い連中だね。奴らにとって天敵であるワシやタカも少ないし、街路樹や公園など適度に寝ぐらになる大木もあるしな。都会は絶好の生活空間なんだよ」

怜が横から口を挟んで来た。「じゃあ先生、都市の生態系としてはこれで成り立っているんですか？」「今なりにね。でも大切なことはこれ以上変な方向に走らせないことなんだよ。人間がゴミを出すからカラスも増えるわけだろう？餌が少なくなればこれ以上奴らも増えることはないよね。だから綱川君のやさしい気持も、都会の生態をより活性化させてしまう因子となる危険性をはらんでいるんだよ･･･大げさかな･･」綱川がボソっと呟く。「先生、よ～くわかりました。人間が餌を提供したことで都会にカラスが増えてしまったなら、自分の行為は間違っていました。動物園の動物だってむやみやたらに餌をやらないでくださいって書いてありますもんね。」「ハハハそれはまた違う意味合いだよ。でも野生の世界に生きる者たちにとって、自ら生きる術は自身で賄う鉄則がある。与えられることに慣れてしまうのも広義な意味で生態破壊なんだろうね」

奈津子が目の前で餌を突くハシブトガラスを絶妙なタッチでスケッチして頭の上に掲げた。「見てよ、いかにも悪そうな顔して･･･額が出っ張ってるから余計に不良っぽいわね･･でも本当は可哀相なのかも」綱川も同意する。「自分もそう思います。生活の場を追われて新たな環境に身を置いたら、今度は害鳥扱いされて･･･」怜が綱川のセリフに被さるように「ネット上でもカラスの被害対策は結構多く紹介されているよ。都会のあちこちで迷惑している人たちがいて･･･でも元を辿れば自分たちの播いた種なのにね」当馬がまぁまぁと手で皆を制しながら言う。「熱い激論になってしまったが、大切なのはこんな風に野鳥観察を通じて自然環境そのものへの関心を高めるということなんだよ。都市化が進んだ環境下では里山が消え、雑木林が減少する中、比較的大きな樹木が植えられている街にコゲラが移ってきている。あるいは暖地に生息し、花の蜜を好むメジロにしても、温暖化著しい都市の公園や街路樹に使われる樹木が花蜜に富むことで大変好都合と考えているのか、よく観察できるね。他にはハクセキレイ、キジバト、ウグイス、カワラヒワ････結構見られる種類は多いんだよ。もちろん目まぐるしく都市環境は変化していくから、その度に適応してくる種類も変わってくるんだろうな････でも全ての緑が灰色のコンクリートになってしまったら、生物たちはどこに行くんだろうね･･･」ちょっと神妙な空気が漂ったが、メンバーの誰もが当馬の顔から視線をそらすことはなかった。

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.89 発行日 2009/9/20
編集・発行（財）府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町 6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/